

第19回 日本認知症グループホーム大会  
「手と手をつなぐ認知症支援の輪」  
～認知症グループホームの生き残りをかけて～

期日：平成29年9月9日（土）・10日（日）

会場：国立京都国際会館

主催：公益社団法人 日本認知症グループホーム協会

参加氏名：河野光男

今回の日本認知症グループホーム大会京都大会は、例年よりも1ヶ月早く開催され、全国から発表者を含め1000名余りの方が参加されました。

先ず一日目には、厚生労働省の認知症施策推進室長の田中規倫様より「認知症対応型共同生活介護を取り巻く状況と今後に期待すること」と題し、地域包括ケアシステムの強化をするために介護保険法を一部改正について、認知症施策の現状と今後の動向について、また認知症カフェの事例を挙げ、認知症の人の介護者への支援やこれからの認知症GHに期待されること等の話がありました。昼食時のランチョンセミナーでは名古屋大学の葛谷雅文氏により「認知症におけるフレイル・栄養の問題」についての講演があり、午後からは清水寺貫主の森清範氏の「心の形（すがた）」と題しての講演でした。森清範氏は年末の国民的行事となった「今年の漢字」の揮毫をされる方で、今回の講演では「人皆の心の奥の隠れ家に鬼も仏も我も住むなり」など、昔からの教えや仏法に触れる有難さをユーモラスな語り口でお話しされ、参加者のこころを浄化されたのではいかと感じました。

分科会およびポスターセッションは7会場で行われ、同時に他の2会場では事前登録制での「グループホーム経営を大いに語る場」「ワールドカフェ風情報交換会」が開催されました。

二日目は教育講演で「グループホームケアと今後の認知症グループホームのありかたについて」の演題で認知症介護研究・研修東京センター長の山口晴保氏が講演されました。まず始めに認知症GHの位置づけや現状を話された。認知症については「目的のある人生で認知症の進行遅延」の研究を紹介され、認知症の方の人生の目的評価（人生経験の意義、自己決定、目標志向）することが大事で、志を持って生きてきた人の方が脳の病変があっても認知症が進みにくい、逆に目標が全然無かった人の方が認知症の病変が進んでいくとの研究成果を紹介されました。またBPSDの包括的予防・治療方策では共感的に理解することが大切であること、認知症の方の話を傾聴することで、自分の価値が認められ介護者との関係性が成立していると感じ、不安や混乱はなくなる。また認知症の人を積極的に褒めることで絆が強くなる。ポジティブな発言や考えが認知症の人や介護をする人にも心理的な負担が軽減されるなど、わかりやすく講演されました。私たち宮崎県認知症高齢者GH連絡協議会の全体研修会でも是非ご講演して頂けたらと思いました。

2025年には認知症の人は700万人を超えると予想される中、新オレンジプランではグループホームは認知症ケアの拠点としての役割を期待されています。私たち介護の現場では介護人材の不足が最も深刻な課題となっています。今働いている介護職員がモチベーションを下げることなく前向きに働ける環境づくりや、研修等に取り組んでいきたいと思いました。